

向日が丘支援学校の3年間の研究活動について

## 向日が丘のキャリア教育

「自分らしく 人とともに 今を生きる力を」  
～それぞれのステージごとに育てたい力を授業を通して考える～

研修・研究部

### 1. はじめに

平成22年度の京都府立八幡支援学校、平成23年度の京都府立宇治支援学校の開校に伴う肢体不自由児童生徒の転校により、本校では、肢体不自由児童生徒が減り、知的障害、自閉症スペクトラム障害の児童生徒が増加傾向にあります。

また、不登校や家庭環境などを含め、修学困難な状況にある児童生徒の小中学校からの転入学が増加しています。現在は、支援学校の在籍児童生徒の障害実態が変化していく過渡期だと言えます。

教員においても大きな変化の時期を迎えています。団塊の世代の大量退職に伴い、教員の世代交代が大きく進んでいます。それに伴うベテランの教員と若い教員間における学校の組織文化(ものの見方、児童生徒観、指導観等)の引き継ぎおよび連携など世代交代に伴う課題が喫緊の課題となっています。

そのような状況の中で、本校が大切にしてきたことを確認・継承しつつ、現在の社会や児童生徒実態に応じて、私たち教員がどのような教育をしていけばよいのか、さらに今後向日が丘支援学校が乙訓地域の特別支援学校としてどのような役割を担っていくのかが問われている時期でもあります。上記のような時代背景のもとで、「向日が丘のキャリア教育」という研究テーマを設定し4年間の研究に取り組みました。

### 2. 向日が丘が大切にしてきたもの

本校では、毎年クラス毎にクラスの教育課程表を作成し、グループで冊子にまとめています。内容は①基礎集団について ②クラスの教育目標 ③指導上の留意点について ④必要な集団とその保障について ⑤自立と社会参加について ⑥教育活動についての6つの観点で記載しています。その冊子の作成は、国際障害者年(1981年)の翌年に、研究部が観点を提案し、それに基づき全クラスで毎年集団論議して作ってきています。

①子どもの実態を捉え、その子どもたちにあった教育をつくること

養護学校義務制実施(1979年)後、従来の肢体不自由障害単独校から、知的障害の子どもも受入れ、様々な障害の子どもが同一の学校で学ぶいわゆる知肢併置校となりました。

②当初の学年別基礎クラス編成から障害・発達別の基礎クラスから学習グループ編成がされ、研修・研究組織は、学部単位以外に障害別に学部の枠を超えた縦割研究会が組織され、小・中・高とつながった視点で研修・研究をおこなうシステムとなりました。

③各学部から独立した「自立活動部」があり、運動機能、言語指導や自閉症教育を専門的に行う療育指導の3つのパートが、学部の枠を超えて、障害の特性に視点を当てた指導を系統的におこなないました。上記の縦割り研究会とともに、学部から独立した自立活動部の存在は、学校全体として一貫した指導をするという大きな役割を果たしました。

④「完全参加と平等」をテーマとした1981年国際障害者年を契機に大きく変化した障害者の社会的な位置づけも教育課程作成に反映させました。

向日が丘の教育の歴史を振り返ると、知肢併置校となったことを契機として、学部単位を超えた障害種別の指導体制の構築、研修・研究体制の構築が早期から取り組まれ、障害、発達、生活実態、集団という障害児教育にとって大切な観点を明確にした教育が行われてきたといえます。

### 3. 生じてきた課題

上記のとおり、障害、発達、集団を大切な視点として長年取り組んできましたが、本校独自の授業形態である「課題学習」の概念が曖昧になり、「課題学習は教育課程の中でどのように位置づいているのか」、どのような授業を課題学習と呼ぶのか等々の課題が生じてきました。世代交代や他校からの転任者増加が進む中で、「課題学習」に関する問題は年々大きなもの

となってきました。

また、一貫性、系統性という考え方を大切にしてきたにもかかわらず、学部間で指導に関する考え方の差異が生じてくる等々の課題も生じてきました。

そのような状況を踏まえて全国的に多くの学校で研究・実践が行われている「キャリア教育」の研究に取組み、キャリア教育に関する知見を深めることを通じて、「課題学習」の教育課程上の位置づけの整理や、キャリア教育の視点による教育課程の系統性、一貫性の再構築を図ることを目指すこととしました。

#### 4. 「向日が丘のキャリア教育」の研究の進め方

① 小・中・高・寄宿舎の発達別、障害別ライフステージ別などの単位で「卒業生の姿から学ぶ学習会」を進路部と研修・研究部が連携して企画し、児童生徒の自立の力や乙訓地域の関係機関との連携・協働の現状を学習する。

② これまでの実践の積み重ねを新しい世代に引き継ぎ、すべての教職員の検討や論議でさらに発展的な教育実践の充実を目指すため、授業研究を通じて行う。

また、その研究は小・中・高・寄宿舎の各学部ごとにサブテーマを決め、授業を通して研究を進め、中間報告の機会を設定する。

③ 卒業生本人や卒業後の進路先で様々な形で卒業生を支援しておられる方々から学ぶことで、向日が丘で学んだ卒業生が「より良く生きるためにはどのような力を向日が丘支援学校において育てることが求められるのか。」を地域の関係者とともに考える機会を設ける。

##### (1) 1年目…平成24年度

本校では「キャリア教育」を全校課題として位置づけ(キャリアプロジェクト会議資料参照)、平成24年4月に各部署が互いに連携してすすめるために運営会議のワーキンググループとしてキャリア教育プロジェクト会議を立ち上げました。

初年度は、全国の特別支援学校に「キャリア教育」が何を提案し、向日が丘の教育に求められていることは何かを中心に研修・研究しました。

研修・研究部としては、平成24年度の<研究の重点>を下記のとおり設定しました。

1. 「キャリア教育」についての研修を二つの観点から進める。

(1) 「キャリア教育」とは何か？現在の社会の状況と併せて研修する。

(2) 本校で大切にしてきたことを再学習する。

2. 授業づくりの充実の意識化を図り、全教職員が担当の障害・発達のレベルを越えて意見を出し、深め合えるようにする。

3. 全校で自閉症スペクトラムの児童生徒が増加している実態に鑑み、さらにその細かい実態及び教育の現状と課題を全校で共通認識していく。

6月の全校研究会では「向日が丘のキャリア教育とは」について下記の内容を確認しました。

① キャリアプロジェクト会議について

② キャリア教育にかかわる理念や方向性

③ 向日が丘支援学校が大切にしてきたもの

④ 地域の状況や保護者の願いと向日が丘支援学校の進路指導について

キャリア教育は当初、職業自立の観点が強調され、職業教育との関連が主な内容であるかのように考えられてきました。しかし、現在では、障害の重い人も含め、全ての人にとって生涯を通して豊かに生きていくことを重要な観点としていることがうたわれています。本校は、障害の重い児童生徒を多く受けとめてきた歴史があり、まず、障害の重い生徒の卒業後の生活を支える取組から学ぼうという目的で下記の内容で全校研究会を12月に設定しました。

全校研究会では、社会福祉法人あらかぎ福祉会の施設長様を招いて講演会「あらかぎから学ぶ～卒業生の姿を通して～」を実施しました。

学び育った地域で、いつまでも豊かに暮らし続けたいという理念を掲げ、重度障害者の支援に取り組んできたあらかぎ福祉会の施設長から、あらかぎ福祉会について話をいただき、最後に学校教育に求めるものとして、「学校教育の中で育てる力が、その後の生活の土台となる」、「学校教育でつけて欲しい力は、人への信頼と基本的な生活習慣の力である」ことを伝えていただきました。

2回の研究会を通して本校の教員から、「キャリア教育」という用語に抵抗があり、どうして「キャリア」という言葉を使わなければならないのか？向日が丘で大切にしている教育とどう違うのか？職業観・勤労観の育成のみに焦点が絞られてしまわないか？という危惧などさまざまな意見が出てきました。

本校では、教育課程表の作成の中で「社会参加と自立」の項目を立て児童生徒の実態にあわせて考えてきました。30年

以上前の取り組みとしては、先行した取り組みだったかもしれません。

「キャリア教育」に対する学校として組織的な学びをしてこなかったため、1年目の研究においては「キャリア教育」とは何かに終始し、教職員一致して本来のキャリア教育の概念を理解するまでに到らなかった感がありました。

プロジェクト会議を重ねる中で、キャリア教育を狭義の職業教育としてとらえるのではなく、すべての障害、すべての学部を通底する向日が丘支援学校のキャリア教育全校テーマを考え、全校に提案し、進めていくこととしました。

#### <全校研究テーマ>

「自分らしく 人とともに 今を生きる力を ～それぞれのステージ毎に育てたい力を授業を通して考える～」

(※1…全校研究テーマについては、2-1 向日が丘キャリア教育参照)

## (2) 2年目…平成25年度

全校の研究テーマ設定の理由と設定までの経過を確認した上で、各学部の研究テーマを決め、確認しました。

#### 小学部テーマ

「すきなこと すきな人をつくり広げ、自分の思いが出せる子に」

#### 中学部テーマ

「実践を通して中学部時期に育てたい力について研究を進める」

#### 高等部テーマ

「卒業後の豊かな生活につながる高等部の教育実践を考える」

#### 寄宿舎部テーマ

「なかまとともに豊かな生活をつくる力」

平成25年度の<研究の重点>は、下記のとおりです。

1. 児童生徒に合った教育課程の充実の観点から、授業づくりの実践研究を進める。
2. 卒業後の姿や12年間の学校教育を見通して、各学部で育てたい力を考える。

平成25年度の全校研究会は、決定した全校研究テーマに加えて上記のテーマ設定のもと、下記の研修・研究会を企画実施しました。

1・2学期は、進路指導部と共同計画で、学校教育でどのような力を育てることが求められているのかを進路先の方々からの講演を聞いて卒業後の姿からフィードバックして考えるもの

でした。卒業後の進路先から「生活介護」事業所(前年度講演:あらぐさ)、一般就労{(株)松栄堂}、就労移行・継続A・B型(ひまわり園)の3つに分類し、それぞれの所から話を聞かせていただき、卒業後を見通して、今育てたい力は何なのかをあらためて考えました。また、研究テーマに沿い、講演内容に該当する生徒の取り組みを高等部・寄宿舎部から実践報告を行うことで、卒業後の姿と学校での取組を繋げて考えられるようにもしました。

1学期、寄宿舎部は、事例をとおして寄宿舎生活の中での軽度知的障害の生徒の取り組みと生徒の育ちの報告をしました。「子どもの本当の願いを受けとめ、認め合える仲間作りを目指して」のテーマで執行部(寄宿舎における生徒会)としての役割や葛藤、夜の男子トークの中から生まれる友情や寄宿舎指導員との信頼関係等が報告されました。

(3-5-3「子どもの本当の願いを受け止め、

認めあえる仲間づくりを目指して)」

研究会の後半の部では、軽度知的障害卒業生の就労先:松栄堂の工場長様を招き、会社での卒業生の仕事の様子を映像で伝えていただき、その上で貴重な示唆に富むお話をさせていただきました。その概要は以下のとおりです。

会社の中で自分が必要とされていると感じる喜び、様々な社員の人たちとのコミュニケーション能力、あいさつをする、遅刻しない等の社会人としてのルールを守れることができる力の大切さが話されました。知識・技術の力よりも一生懸命に取り組む力のほうが一般就労にとっては大切であることを教えていただきました。また、卒業生本人からも、働くことの大変さ、必要とされることの喜び、会社内で努力することによりスキルアップしていくことの喜びとやりがい等を直接聞くことができました。卒業生が生き生きとした表情で語ってくれたことが教職員には、大きな喜びでもありました。

2学期は、高等部から特別活動(校内名称=自治活動 以下自治活動と記述)について報告がされました。向日が丘支援学校高等部には、自治活動として図書部・美化保健部・放送部があります。今回は、図書部の活動をとおした生徒の育ちが報告されました。図書部の活動は、本の整理、管理、読み聞かせの活動などがあります。自治活動の中で、生徒同士が助け合いながら、小・中学部児童生徒を対象にした出前による絵本の読み聞かせに取り組みました。取り組みをとおして自分たちの読み聞かせを楽しみに待ってくれる人がいる喜びを感じ、喜びを感じるがゆえにもっと上手になりたいという積極的な気持ちの育ちがみられ、他の授業場面での自己肯定感や自信にもつながったという報告でした。

(3-3-4「美化・保健部、図書部、放送部の活動から)」

研究会の後半は、就労移行・継続A・B型事業所「乙訓ひまわり園」のセンター長様から、お話をいただきました。

センター長様からは、学校在学中に社会性やコミュニケーション能力を培って欲しいことや集団の中で力を発揮できるようにしておいて欲しい等、卒業後を見据えて在学中につけておいて欲しい力について具体的なお話を伺うことができました。

3学期は、小学部の訪問教育担当者から障害の重い子どもの「自立と社会参加」に関する報告をしました。

「キャリア教育」はともすれば障害が軽い児童生徒を対象として考えがちですが、障害の重い児童生徒の自立と社会参加をどう考えるかを全職員で考える機会になり、キーワードとして「自己決定」「役割」「誇り」を持つことの大切さ、子どもの願いを探ることが教育の役割であることを訪問教育の実践から学びました。

(3-1-3「ぼくにまかせて」)

上記のとおり、2年目の取組は、全校テーマをもとに各部署ごとにサブテーマを設定し、授業(実践)をとおして子どもたちに育てたい力(育てることが求められる力)について研究を深めました。

全校研究会では、前述のとおり、最も障害が重度の訪問生から軽度の生徒まで、年齢・障害や発達の異なる児童生徒すべてを対象として「キャリア教育」の研究を深めました。最後の訪問教育担当者から提起されたキーワード「自己決定」、「役割」、「誇り」は、どの報告の中にも共通している大切な概念であることが改めてわかりました。

### (3) 3年目…平成26年度

この2年間で、「キャリア教育とは何か」からスタートして、過去に向日が丘で大切にしてきたことをキャリア教育の観点で見直してきました。また、進路先の方から卒業生の姿に基づく、話を聞き、「学校時代に育てたい力を考える」取り組みを行ってきました。各学部(寄宿舎部含む)もそれぞれの学部のテーマに沿って研究活動を計画的に進めました。過去2年間で学んできたことをまとめ、日々の授業(目の前の子ども理解、教育課程作り、授業実践、生徒指導など)の中に具体的にどう生かしていくかの26年度年度の課題でした。

平成26年度<研究の重点>は、前年度同様にしました。

1. 児童・生徒に合った教育課程の充実の観点から、授業づくりの実践研究を進める。
2. 卒業後の姿や12年間の学校教育を見通して、各学部で育てたい力を考える。

1学期の全校研究会は、最初に「全校テーマに基づく研究について」確認しました。次年度が対外的な発表の場である公開研究会になるため、また、新たに赴任してきた教職員と本校

のキャリア教育研究に関する基本的な視点を共有することを目的として、これまでの研究活動の経過と現在の到達点について報告しました。

その後、12年間の教育を重度重複生徒の例から考える「卒業生Aさんの教育を振り返って」を寄宿舎部から報告しました。本校に12年間在籍し、重度重複障害がある家庭的にも厳しい条件であったAさんが、地域で暮らしていきたいという保護者も含めての希望を持ち、様々な困難を乗り越えて希望の進路を実現し、卒業していった姿とその経過を小・中・高等部の担任、自立活動部の担当からの話を交えて報告しました。

(3-5-2「親子の暮らしをともに考える学校」)

報告を受けて「自分らしく 人とともに 今を生きる力を」の全校テーマの視点で、1学期の一人一人の授業を振り返って語り合う分散会を実施しました。分散会では、テーマに関わるキーワード「思いが出せるとは」「自分らしく」「内面に迫るとは」「集団と共同学習」「人とともに」「進路」「今を大切に」を設定し、小グループに分かれて協議しました。

特別支援学校に求められることとして、12年間のつながりの中でそれぞれの時期に育てたい力を丁寧につけていくことがあります。一方で、小中学校から転入学してくる知的には軽度ですが、コミュニケーションが難しい、集団に入れない、家庭的にも厳しい状況がある等の生徒に、高等部3年間あるいは中・高等部6年間でどのような力を育てて社会に送り出すのかという課題があることがいくつかのグループから挙げられ、障害実態が大きく変わってきた本校の特徴的な課題であることがわかりました。

また、そのためには教職員一人ひとりが障害理解を深め、適切な支援や指導ができるように力量を高めることと併せて、小・中学校との連携が重要であることを改めて認識しました。

2・3学期は、次年度の公開研究会に向けての中間報告を各学部から行い、最後に1学期と同様にグループに分かれた分散会を実施しました。

分散会での協議を元にしてまとめた学部ごとの特徴は以下のとおりです。

小学部は初めて学校という環境で学ぶ時期であることから、まず学校という環境に慣れること、先生との信頼関係を築くこと、その上で好きなこと・好きな友だちを見つけ、楽しい取り組みを積み重ねていくことが大切な時期です。

中学部は、思春期に入り身体と心との変化があり、性も含め、様々な変化が生じる時期です。しかし、小学部の学校環境に慣れる時期とは異なり、グループ・集団を意識して、その中で様々な経験を積み、学習していく時期です。

高等部は、思春期から青年期に入り、学校生活の集大成として卒業後の進路に向けて小・中学部で培った力を基礎として社会人への準備をする時期です。

特別支援学校は小・中・高等部があります。12年間本校で学ぶ生徒は少なくなってきたとはいえ、学部間の連携ができる条件がある学校です。校内における様々な連携を組織的に行うことの大切さを確認しました。

12月に、日本におけるキャリア教育のオーソリティである筑波大学名誉教授渡辺三枝子先生をお招きして「キャリア教育」について講演していただきました。渡辺先生のお話により、「自分らしく、人とともに 今を生きる力を」という、向日が丘支援学校のキャリア教育研究のテーマはキャリア教育の本質を表現したものであることやキャリア教育研究をとおして、系統性、一貫性のある教育課程の作成を目指すこと、また、日々の授業改善を行うことをとおして研究を行うことなど、本校のキャリア教育研究の方向性、研究方法等が「教育改革運動」としてのキャリア教育であったことを確認することができました。

渡辺先生の御講演内容については、別掲講演記録(2-03「自分らしく 人とともに 今を生きる力を」 渡辺三枝子氏)をお読みください。

#### (4) 発表の年・平成27年度

今年度は公開研究会を実施これまでの研究を発表する年です。

12月の公開研究会に向けて、各学部では今までの研究のまとめをし、準備を進めました。本研究を行う中で、向日が丘支援学校で大切にしてきたこと

①子どもの姿が見える。目の前の子どもから出発している。

(アセスメント表やクラスの教育課程表の作成)

②教師間での丁寧な話し合いを大切にしてきた。

③48年間の教育活動で培ってきた地域とのつながり。

の再確認を学校全体でできたことや各学部で育てたい力を考えていく過程の中で、学校教育目標をキャリア教育の視点で改定する必要があるのではないかということにも気づくことができました。

加えて、本校の教育課程で重度・重複障害児童生徒や知的発達が4・5歳程度までの児童生徒を中心に実践が行われてきた「課題学習」に関しても、歴史を知ること、そして、「課題学習」という用語が意味するところの概念を再度明確にし、学習指導要領との関係及び本校教育課程における再度の位置づけを丁寧に検討する必要があることを全校研究会の中で実践報告を通して確認することができました。

(3-2-5「仕事しらは自分しらべ」)

ただし、向日が丘の「児童・生徒の障害・発達の状態」に応じた学習スタイルである「課題学習」の基本視点は今後も引き継いでいきたいと思っています。

(2-04 向日が丘の「教科」学習と「課題学習」)

また、一貫性、系統性のある教育課程の作成に関しては、現

時点においては、まだ途上です。キャリア教育研究を、公開研究会の発表をもって終わりとするのではなく本校における一貫性、系統性のある教育課程の確立をもって研究の成果が実を結んだといえるものと考えています。

今後の研究活動も本研究と同様、全校の教職員一人ひとりが何かを学び、何かを掴んで「明日の実践」に生かせる研究活動を実施していきたいと考えています。